西洋文藝附錄

時事新報

第四卷

第廿四号

秋の市武

MARZO 30 de 1929

AÑO IV
NÚM XXIV

Suplemento Literario
"El Argentin Djijo"

文藝陣(二)

美都三

文藝美術も、他の政治・道德等と等しく重要ふる社会現象の一であつて、人類に厂史ある限り如何ふる太古未開の時代にも、其の生存狀態に相應はしい文藝は必ずあつたものらしい。

今日現に生殘つて居る各種の蠻人を見ても、或は上古の蠻人が殘した遺物に就て見ても、必ず何等かの藝術の影は伴つてゐる。石器類に刻んだ物象の類から、進んでは種々の器具に施した意匠形態、乃至、蠻的ふ歌謠圓舞の類、それに伴ふ簡單明瞭ふ樂器の如きに至るまで、野蠻未開の民族間に相應の発展をふして居る。

斯やうふ原始的狀態にまで遡ると「文藝の起原」又遠きかふの處を深かする。

而して此等の文藝は如何ふる理由から生じたのであらうか？

これには古來幾多の解釋が試みられてゐる樣だ。

然し何れにしても人類の生存にとり、重要欠くべからざる根本的の要求があつたからには相違ふい。

若し進化論の説くところを眞実とすれば、あらゆる人類社会の現象で、人類そのもの、生存に不必要ふものは、何時までも存在し、繁榮して行くことを許さふいのが、自然の法則である。然るに文藝は今日に至るまで連綿として益々繁榮し発展して來てゐる。又今後と雖も、容易に滅亡しやうとは考へられふい。

然からば、そこに人類の生存と密接関係を保つ理由が必ずふければならぬ。

これに就ては大体二つの解釋がある樣だ。

即ち第一は、今日の狀態を直ちに過去の凡てにも惟し及ぼし、又それを平面的に見たもので、文藝は文藝自らの特種ふ要求から生じたもの・即ち人类上は太古未開の始から、本性の底に広い意味での藝術を要求する傾向があつた。それが現れて文藝の萌芽を成すものであつて、要するに、よく云ふ藝術本能といふ如きもの、自然の発露に他ならふい。

欠く可からざる要求であるといふ。文藝に隨喜するものの喜こんでかつぎたがる理由である。

即ち大古からして発達の度合こそ異ふれ、文藝は文藝として成立して來た。

蠻人が石刀の柄に、マムモスの形を刻めば、それは当人がこれに依つて、その藝術本能の要求に一種の満足を覚へるからであるといふに帰する。

処で第二の解釋に至つては比較的新しい見方であつて、若い文藝心酔者には余り喜こばれさうにもふい説である。

近来、人類学考古学等の実際的研究が発達すると共に事実を取調べて見ると、太古野蠻の民族が遺して置いた原始的ふ種々の藝術は、今日でこそ、藝術と呼べ、当時の彼等にとつては、必ずしも藝術的要求といふ特種ふ理由から生じたのでは無かつたといふのである。

彼等野蠻人はこれを実用の目的から作り出した。

石刀の柄の彫り物は藝術と自覚して彫つたのではふく、自分の名をかくつもりの心覚えに過ぎふかつた。

又野蠻人が歌の相子につれて踊るのは、單に踊りたい又歌ひたいからではふく、他部落の蠻人と闘ふ場合の團体運動の調練に外からふかつたと云ふのである。

これ等の事実から考へると藝術の起原は、平面的に今日の狀態を推し拡げて解するよりも、寧ろ縱貫的に古代の事実により社会狀態によつて、別々の解釋を下し、それから順次年代を追ふて、解し下つて行くのが正当であるといふ説ふのだ。

の藝術だ。

一種の異つた快感を覚えると云ふてよい。

藝術と藝術とを比較して、その優劣を論ずるのは、後世の人の為すべき事業であらう。

即ち決著は藝術の本能と功利実用とを綜合して居るのが藝術の本来である。（未完）

酒中寂寞歌

長一郎

○酒のみて酔ふ楽しさを知りそめ
何にか後ぶ酔ひがまもわからず。

○酔醒めぬ酔ひ覚れば人もなほ
酔ひ醒めぬ酔ひ覚れば人もなほ
酔ひ醒めぬ酔ひ覚れば人もなほ
酔ひ醒めぬ酔ひ覚れば人もなほ

○再び見れば注ぎ酒のあるかぎり
酔ひ醒めぬ酔ひ覚れば人もなほ

秋!!

捨小舟

やがて雨が降り出すのだらう、重苦しく空は曇つてゐる。
ひやゝかな秋風が木々の梢を吹き渡つた。
二人は黙つて夕暗を歩いてゐる。
病葉がぱらりと散つた。
「さびしいわ……」
女が云つた。
男は黙つて歩いてゐる。
「ねーあなた……」
女は又云つた。
男は黙つて歩いてゐる。
はるか、かなたの町の灯が、哀しく光つてゐる。
女の白い顔が夕暗にうく……。
そしてふせがちその瞳に涙がにじんでゐた。
男は黙つて歩いてゐる。

詩

此の頃

蘆生

ふんにもふい
ふんにもいらふい
果敢ふる夢。
毎日働く
水曜と土曜は彼女に逢ふ
日曜はシネへ行く
博奕はやめた。
低能兒の有するだけの能力。

雑吟

京太郎

○

彼の君が、つかひの如く
忽に来る
利久鼠の名も知らぬ鳥。

○

ペイネッタを
傍すて女のほゝゑみに
佇むわれの想ひは遥か。

○

ローランサンの絵を見て心ときめきぬ
淡き想ひ出
似る人のあり。

○

フロリーダの
華やけきかかに伴みて
行く燈のともしかつかしみけり。

○

ゆくりなくも
黙子の乙女に行き会ひて
忘れかねし夢の絲は乱れぬ。

○

今日も亦
うれしきものを二つ見し
ゴーギヤンの絵と大リヴェールの舞踊

○

部屋にかけし
寫樂が妓のうす笑ひ、
嘲る如くわれをみつむる。

○

道端の
猫の屍骸が目につきて
一日仕事が厭になりたり。

旅愁

捨小舟

惱めども語らふ友のふき身故
ひとり寂しく故郷を恋ふ。

たらちねの母を夢見し有明の
傾く月に、涙こぼしぬ。

秋の夜にはじめて知りしまだ若き
乙女の姿、紅き唇。

許されぬ恋もつ男憐れにも
秋の夜更けの街をさまよふ。

とつ国に孤独を友とせし日より
物思ふ身と、成はおりけり。

一人逝き二人去りゆく兄弟の
なきての後の人の悲しき。

小夜更けて独り留守居の枕辺に
悲しくもきく秋雨の音。

民謡

田舎の夜

フロリーダにて唄ふ
セバスティアン

△ほこりだらけのきたない道も
今宵は月夜で金の道。

△風が吹き出し秋の歌うたふ
わたしゃ、さびしと云ふて見た。

△遠いブエノスの灯がちら〳〵と
はやくおいでと、わたしを呼んでる。

△町はきれいで女と酒が
淋しい心をうき〳〵させやう。

△酒も女も悪るくはないが
今のわたしにゃ、ようはないし。

△朝ふ夕ふにくわもつ身には
つれない夢がたのもしい。

佛蘭西詩集……(一)

ステファン・マラルメー氏を想ふ

琺瑯生

汗息く古びた麦藁帽を破れた感じ(センチメント)の如く脱ぎ捨て、鼠色のソフトと洋服、意気な蝶首飾(ネクタイ)を結び エナメルの靴も軽く、滑らかな舗道を何の的もなく、死んだ木の葉のように、さ迷ふて見たい頃になった。

煤けた氷菓子の広告も今はさびれ、開け放たれてゐた珈琲店の玻璃戸も閉ざされて、やる瀬ないタンゴのメロディーがなにかしら薄ら悲しく啜り泣いてゐる。

黄金色の太陽が高い玻璃窓の紫色の窓枠の上でだるくゆれはじめる午後、とりとめもない散歩に軽い疲れを覚えたなら、瀟洒な珈琲店の窓ぎわにそつと腰を下して暖い珈琲の白い湯気のすう〳〵と延びてゆく、その淡い蔭を何時迄も見つめながら、あの珠玉のような佛蘭西詩集でも想はうではないか。

黒く磨かれた卓子の片隅に置かれた緑色の硝子器(フラスコ)には数輪の野菊が差されてあり、落付いた壁紙には美しい絵のカレンダーが掛けられ、その生々した白い顔には血液のように赤い字のMARZOが輝いてゐる。

柔かくてさら〳〵したタッチの絢爛な佛蘭西詩集。

死んだ緑色の湖面のやうに静かな深刻な詩。

水晶のような水盤のなかで ニムフのもらす溜息の様な詩。

黄金色の薄明の中で嬌慢の面を靴す孔雀の様な詩。

とりわけ私はあの雪の様に白く、すり切れた古い宝石細工のようなマラルメー氏の詩を愛する。

「古いサクソニーの時計、それはのろい、そしてその花や神々の間で十三時をうつ。それは全体誰のだらう？

それは昔、郵便馬車でサクソニイから来たものだと御考へですか？」

（不思議な影がすりきれた窓硝子のまわりにぶら下ってゐる）

「そして鍍金細工の縁に冷たい泉の様に深く湛えられた御身のヴェネチヤの鏡、其処には何が映ってゐるでせう？ 嗚呼、たしか一人以上の女が、彼女の美しい罪をまとふて其処で水を浴びたにちがいありません。そして恐らく私があまり永い間眺めてゐるなら、裸体の幻を見るでせう」

「性悪な人よ、おんみは屢々性悪なことを云ひます」

「（私には高い窓の上に蜘蛛の巣が見へる）」

「私達の衣裳戸棚はたいへん古びてゐる。御覧んなさい、ぽんと焔がその悲しい板を赤く染めるでせう！ 物倦い窓掛も同じく古い、そして色褪せた肱掛椅子の絨氈も古い彫刻も、これ等の古物がみんな。

この青い鳥さへやがて色褪せればあんなには思はれないでせうか？」

……………………

色褪せた物の姿。

凋落と云ふ言葉が云ひ現す物。

羅馬最後の刹那に於ける滅び行く詩歌を愛した孤寂な魂の震へるマラルメー氏の詩をこの上もなく愛する。

彼の幻想には云ひ知れない薄暗い感じと色彩とがある。

雨の降った後の泥水の中に黄金の月は暗い淋しさで何物かを暗示してゐます。

"*Nommer un objet c'est supprimer les trois quarts de*

la jouissance du poème, qui est faite du bonheur de devinir peu à peu; le suggérer, voilà le rêve."

一つのものを名ざして明に云つてしまうのは、少しづゝ推定して行つて面白味のわく詩に比べてその興味の四分の三をそぐものだ。

暗示と云ふことが即ち幻想なのだ。

彼の詩作の標準はこゝにあり又象徴派詩は、之を基礎として生れたとも云へやう。

ともかく、彼は象徴派(サムボリズム)の御大である。

然も彼の詩は最も難かしい。固に見へない絲で編まれた色褪せた夢、をほどくには矢張り憂鬱が憂鬱い魂のやうに鋭い針が必要であらう。

淋しい珈琲店の隅で玻璃窓へ忍びやかに訪れし来た秋の黄昏を愛しながら、私は佛蘭西詩を想ふ。

秋風にすり切れた蜘蛛の糸のたゆたふ神秘な詩としてラルメラー氏を想ふ。

私は "Après-midi d'un faune" を想ふ。

俳句　雑句　残星

○暖き石を叩いて見たりけり。

○夕風に秋近き草の戯き哉。

○ヌメロをば見上つ来るや郵便夫。

○室内へ日影猶延ぶ若葉かな。

○悪猫がトタンからして落ちにけり。

船は出て行く鷗は歸る

（神戸出発当日の日記より）　彦左

雲まじりの大甲風が物凄く港の町に吹き荒れる。

いや応日だ。

最後の夜を心ゆくばかり泣いたせいか、やけに眼がはれぼつたい。

いよく今日は南の国へ旅立つ……俺のあこがれの南の国へ……。

うれしい。なぜかべがおどる。

然し寂しい様な気もする。

午後四時の出帆には、まだいぶ間があるので、兄貴と二人で三越へ行つた。

一月も前から色々買物も、と、のべておいたんだが、いざ旅をすると、あとから〳〵買ものが出てくる。

食堂の前を通つたら、兄貴が飯を喰はうと云つたので、なんだか二、三日前からそはく〳〵して、腹のことなんか、問題にしてゐなかつた俺も、腹がへつた様な気がしたので食堂へはいつた。

好物の天ぷらと、まぐろのおすしを注文した。

俺は兄貴の顔を見た……なんだか沈んでゐる。

天ぷらも、まぐろも、もつとぶん喰へない——いや下手をすると、これが喰ひおさめにならぬかもしれないと、俺は二人前がそこづ、喰つた。

自働車をおごつて波止場へいそぐ。

午後一時、俺は○○丸の船客となる。

見送りの人は誰も来てゐない。

一寸寂しい。

二時頃、おふくろ、飯田のおばさん、弟ふじがやって来た。
F子は未だ来ない。俺はもう見送りには来てくれないものとあきらめた。
出帆を知らせる最初のドラが鳴った時、彼女は小走りに船に近づいて来た。
俺は、見送りの人の手前も忘れてFちゃんと呼んだ。
友人のE子も一緒に来てくれた。
F子は、奇麗な花束を俺にくれた。
そしてカーネーションの一輪を俺の胸にさしてくれる。
親父からは見はなされ、F子との仲は親のためにさかれ……
すべてを知ってゐるE子は俺の報いられなかった心を慰めてくれた。
俺は笑って別れる事を誓った、二人に……「Fちゃん、それじゃ
二人はいつまでも兄妹でね」「エ、……」
彼女は寂しく涙をふいた。お互様だ。
寫眞屋に俺と見送りの人々との寫眞をとらせる。
四時二十分前！けたたましいドラがなる。
おー！俺は別れと云ふもの、悲しさを、初めて知った。
然し俺の心はいやに興奮する。俺の血は湧き立つ。
悲しさにか？うれしさにか？俺自身にもわからない。
時はたつ。俺はF子の手を堅く握りしめた。
「左様なら、「お達者で」時は来た。恐らく娘としての彼女を
見るのは、これが最後だろう。俺は涙をのんだ。恐らく彼女も…。
俺達の妻は人から見れば、若気のいたりの、たわいないもの、様
に思はれたかも、しれない。然し俺達にして見れば眞剣そのも
ものだった。もつても誰だって悲する時は眞剣だぞと、おつし
やるかも知れないが……。
要するに、まにならぬ浮き世に生れて来たのが悪るかった
のだ、誰も恨む事はない。
然し飽迄も俺達は清らかな悲を保ち得た事を天地神明に
ほこった。くだらない事だが……。
最後迄、船に残ってくれて居た兄貴も降りていった。
やがて…ブリッヂは取られ、テープは投げられ……船は、
静かに出て行く。
「さようなら」
俺の涙線はとうとう破られた。涙が頬をつたう。
然しそれは悲しみの涙ではない、報られなかった、今迄のすべて
をくつがへすべく、之から希望に向って行くうれしい涙だ。
「Fちゃん」俺は叫ぶ。船は陸から遠ざかる。
幾百人、幾万人の見送りよりも、心からふる彼女の見送は、ど
んなに俺をよろこばしたか！
突堤のつきる処まで兄貴が来てくれた。
兄貴も泣いてゐる。十年間この方兄貴の涙を見た事はなかったが。
「兄さん俺はきつと、きつと成功してくるぞ」。
あんなにまで仲の悪るかった兄貴が……。
まったくだ、祖先を通じて子孫に及ぶ血統の流れが
生める愛の心は、いつの世までも大ーロラの如く不朽不滅
なのだ。
それから、どれ程、俺は陸に向ってハンケチを振ったか…。
手の續く限り……。
然しもう神戸の町も見へなくなって、鷲取山の頂きの燈
火がボンヤリと、夕暗に浮いてゐるのみ……。
船と競走してゐた、かもめの奴も、もときた路へか
つてゆく。
船は走る。
俺は涙をふいて船室へ下りてゆく。　（完）

美都三氏の「灰色の話」は次号へ廻すことに致しました。

文藝部